

楊寛「中国古代史研究法」

——「怎樣学好祖国的歴史」⁽¹⁾——

高 木 智 見 訳

〈解題〉

以下に訳出する楊寛「中国古代史研究法」は、この中国古代史の碩学による中国史研究ガイドダンスとも言うべきものである。訳者は、中国政府奨学金留学生として楊先生のもとで、二年間にわたり先秦史に関する史料論と現代中国史学史を中心に、懇切なる御指導を賜った。この文章が、そうした御指導の背後にある楊先生の歴史学全般に対するお考えをよく表しており、また、文章自体が比較的入手し難いことをも考慮し、ここに訳出した次第である。

楊寛氏については、いまさら何の紹介も要らぬであろうが、訳者の目から見た楊寛像を少しだけ述べてみたい。

楊先生は、錯綜した古代神話に見事な系統性を与えた「中国上古史導論」(『古史弁』第七冊上編・一九四二年)が、

あまりに大きな影響力を持ったため、顧頡剛の弟子と見られがちである。しかし、実際のところ、童書業が顧の内弟子であったような関係は全くなく、また譚其驥・史念海らが顧の学生であったような関係さえない。楊先生は、まず上海で童書業と知りあい、後に童を通じて顧頡剛と知りあわれたそうである。

楊先生が顧頡剛と師弟関係でないということは、「上古史導論」以前の学風を見れば、より明らかにする。すなわち、一九三八年・長沙・商務印書館初版の『中国歴代尺度考』は、明らかに王国維『觀堂集林』卷一九所収の歴代尺制を考証した諸論考を意識している。また、一九四二年・重慶・正中書局初版の『墨経哲学』は、光華大学在学中以来の墨子研究の集成であるが、一連の研究の背後には、三

○年代前半に盛行した安易な墨子研究の風潮に対する反発とともに、孫詒讓の堅実な著『墨子問詁』に対する傾倒が感じられる。すなわち、楊先生の学問の出発点は、伝統的な中国が産んだ最後の「經学大師」・孫詒讓と、西学の方法をとり入れながらも、清朝考証学の良き後継者であった王国維との両者であったのである。要するに楊先生は、伝統的な考証学をそのバックボーンとして担っているということである。楊先生の直接の師が、科擧の試験を放棄して五〇年以上歴史研究に埋没し、『日知録』・『二十二史劄記』に比すべき（楊先生の弁）読史札記を残した呂史勉であることや、訳注に挙げたような読書筆記を主とした研究方法とを想到すれば、この思いが更に強まるであろう。

楊先生が高い評価を受けているのは、こうした確固たる基礎の上に、その研究が築かれているからであろう。文献を博搜し、さらに考古学・民族学的資料を援用して、茫昧とした先秦史に明確な輪郭を与えつつある先生の研究に、非常な魅力を感じるのとは当然のこととも思われる。

さて本文の構成は、以下のとおりである。まず、厳しく険しい研究者としての道程につき進むための自覚が強調された後、三章に分けて話が進められる。一章では、史的唯

物論の正確な理解とその学習法について述べられ、二章では、中国史の系統的理解とそれを可能にする筆記中心の学習法が、三章では、研究に着手する際の補助学の知識が説明されている。

この文章で楊先生が最も強調されているのは、「直通」・「横通」・「系統性」の三者であろう。同時に、これら三者こそ、先生御自身の学問を形容するに最も相応しい語であると考えられる。

「直通」とは、一言でいえば、悠久の中国史を縦の流れに即して理解することであり、「横通」とは、縦の流れの中にありながら種々の意味において前後の時代から識別できるようなある一つの時代を、政治、文化、社会、経済などすべての分野にわたり、全面的に理解することである。しかも、この両者はどちらかに偏するのではなく常に両立されるべきものである。「系統性」とは、「直通」・「横通」の理解が、いずれも一貫した条理のある組織だったものでなければならぬということである。

試みに、これらを念頭に置き、先生の著書を概観すると、次のように言えよう。

所謂「社会史」的な色彩を帯びた名著『古史新探』（中

華書局・一九六五年)前半所収の諸論考は、古史分期論争の過程における成果であるが、西周・春秋時代の生産用具、生産技術、生産関係、社会組織などを順を追って一つ一つ明らかにしている。また同書後半の「礼」に関する諸論考は、それぞれ具体的礼節の復現に始まり、礼の作用・意義及び変遷を考究し、更に民族的な知識を援用して、その起源にまで説き及んでいる。

先生の代表作『戦国史』(上海人民出版社・一九八〇年新版)は、もともと顧頡剛の北京大学・燕京大学での講義録に童書業が補訂を加えて出版した『春秋史』(開明書店・一九四六年)とともに、齐鲁大学国学研究所の専著の一冊に加えられる予定であった。時代状況により出版には至らなかったが、その基礎作業としての『戦国史料編年』が、解放後に『戦国史』初版として結実したのである。この初版を改訂して、都合四十年に垂んとする時間を経てなった新版は、戦国時代の生産力、社会制度、政治組織、政治史、思想史、文化史、科学技術史など、徹に入り細を穿ち、あらゆる種類の問題が六百頁に書き込まれており、しかも全体として鮮やかな戦国史像を描き出している。

これらの著作は、「直通」に気を配りながらも、「横通」

に主眼を置いた「系統」的な断代史と言える。

製鉄技術史に関する二冊の旧著を大幅に改訂してなった『中国古代冶鉄技術發展史』(上海人民出版社・一九八二年)や、最近の『中国皇帝陵の起源と変遷』(学生社・一九八一年)、『中国古代都城的起源和發展』(執筆中)等の著作は、各対象に焦点を定め、その歴史的展開を逐一明らかにした、つまり「直通」に重きを置いた「系統」的な研究である。

要するに、この一文は、中国史研究ガイダンスであると同時に、楊寛先生の学問のあり方を如実に表明しているのである。

なお、楊先生によれば、「怎樣学習春秋戦国史」なる文章を、上海人民出版社の『怎樣学習中国歴史』(仮題)の一編として近い将来発表されるとのことである。

最後に、翻訳を快諾された楊寛先生に改めて感謝の意を表します。

訳文中の()は著者の、〔 〕は訳者の注である。「」は、原則として原文の 〳〵 にあたるが、日本語に訳出したい単語に「」をつけた場合もある。明らかにミスプリントと思われる箇所は訂正した。

〈訳文〉

中国史の研究には秘訣があるのだろうか、と問われれば、私は次のように答えよう。もし、それが研究の手順・方法に關することなら、確かに秘訣はあり、必らず身につけなければならぬ、と。こうした秘訣を会得してこそ、研究を軌道に乗せ、しだいに成果をあげることが可能になるのである。

しかし、このような初歩の段階をくぐりぬけたとしても、一人前の研究者となるためには、それ以上に長く、かつ険しい研究の道程を歩まねばならない。従って、研究者たらんものは、まず、祖国の社会主義の科学事業に一身を捧げる覚悟を決めたるうえで、長期にわたる着実な研究計画を立て、さらに、それを裏づける刻苦勉強、堅忍不拔の精神が備わっていないければならぬ。

一 史的唯物論について

多くの学者たちが、自己の研究経歴をふりかえって、いずれも基礎固めの重要性を強調している。⁽²⁾もちろん、これは全く正しいことであるが、問題はどのような基礎を固めるかという点にある。この点については、以下の三者を身につけ

ることが緊要であると考えられる。すなわち、史的唯物論の基本原理解、中国史に関する系統的な知識、研究を深化させるための基本的な方法である。

一時期前、林彪・四人組が「理論戦線」を混乱させたことにより、歴史研究者の中にも、二種の悪しき傾向がみられた。一つは、史実を明確にせず、また、確実な史実に依拠せず、当然そうあるべきだと決めつけ、そこから議論をすすめるという傾向である。もうひとつは、逆に、史実の解明だけに専心して、ただ考証のみを重んじ、理論的な分析を顧みないという傾向である。無論、こうした傾向は容認できない。

しかしながら、我が国の歴史学者は、歴史事実を分析する能力に対しては、伝統的に重視してきている。たとえば、唐代の劉知幾は、一人前の歴史学者となるためには、「才」・「学」・「識」の三つの才能を必ず備えなければならないと考えた(『旧唐書』巻一〇二・劉子玄伝)。「才」とは、歴史の文章を書く能力のことであり、「学」とは、史料を収集・解釈・考証する才能のことである。「識」とは、歴史の発展過程を分析し、かつ、明らかにするための観点と見識のことである。また、清代の章学誠も劉知幾の考えを敷衍して、「義理は識に存し、辞章は才に存し、徵實は学に存す。劉子玄(知幾)に

三・長^か兼ね難しの論ありし所以なり」『文史通義』卷四・内篇四・説林」と述べている。

研究の過程を通して、自らを一人前の研究者たらしめるには、確かに「三長」を養うことが必要である。もし文筆の「才」がなかったら、文章はうまく書けず、考えも思うように表現できず、従って人が味読するに耐える歴史の書物を書くなどは全く不可能である。もし史料を収集・解釈・考証する「学」がなかったら、自分の書物に真実かつ豊富な内容を持たせることはできない。また、もし史実を正確に分析する「識」がなかったら、歴史の発展過程を明らかにし、そして将来の行動に指針を与えることはできない。これら「三長」のなかでは、「識」が最も重要である。章学誠は歴史書を、「識」の有無により区別して、有るものを「著作」或いは「撰述」と呼び、無いものを「史纂」或いは「記注」と呼んだ。すなわち、「記注は、往事^かこれを忘れざらんことを欲し、撰述は、来者^{みらい}これを興起せしめんことを欲す。故に、記注は往を蔵すること智に似たり。而して撰述は来を知ること神に似るなり」(『文史通義』卷一・内篇一・書教下)と述べ、両者の性格・機能が相異なることを認めている。つまり、記注(史纂)は「識」を備えぬ史料彙編的なものであり、「往を

蔵すること智に似」という作用しか果せない。一方、著作(撰述)は「識」があり、発展的な観点で歴史を考えるため、「来を知ること神に似」ることが可能となるのである。我々の場合も、たんに「往を蔵す」だけでなく、「来を知る」ことを研究の目的とすることが大切である。こうあってこそ、はじめて現実の政治に「服務」することができるのである。

それでは、どのようにしたら「史識」を養うことができるのであろうか。このためには、学習を通じて各自がマルクス主義の理論的な水準を向上させ、史的唯物論の基本原理を掌握しなければならぬ。周知の如く、歴史学自体も時代にもなつて不断に変化発展している。たとえば、封建社会には、それに応じた封建主義的な歴史学があり、資本主義社会には、ブルジョア歴史学が存在する。事実、前引の劉知幾・章学誠の言う「史識」も、あくまで封建主義的歴史学の所産である。従つて現在の我々が必要とする「史識」は、当然、マルクス主義の歴史科学、すなわち史的唯物論でなければならない。歴史学は、マルクスの弁証法的唯物論と史的唯物論の出現を待って、はじめて真の意味での科学となったのである。故に、この史的唯物論に依拠してこそ、科学的に歴史の本質及びその発展法則を明らかにすることができ、さらに、歴史の経験

と教訓を吸収し、歴史発展の光明な前途を明示することができ。ひいては、「四つの現代化」を推しすすめる信念を強めることができるのである。

現在、歴史学界には、以下のような共通の認識がある。すなわち、歴史研究をうまくすすめるには、完全かつ正確にマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の体系を吸収し掌握し、それらの立場・観点・方法を応用し、さらに細大もらさず史料を収集することが必要である。そのうえで、实事求是の科学的な態度を以て、史実に対して具体的分析を加え、「史」と「論」の結合、革命性と科学性の結合がなされなければならない、という認識である。

しかし、こうした次元まで到達するには、相当の困難がともなう。しかも、問題は我々が学習の中でいかにして為し遂げていくかということにある。いま、中国農民戦争史の研究を例にとってみよう。^③ 建国後三〇数年来、史学界は、この方面にかなり広範かつ系統的な論究を行ってきた。既発表の論文は三千五百余篇にのぼり、出版された研究書・論文集・資料集・小冊子は二百種に達する勢いであり、まことに多大の成果を収めてきたと言える。また、今後の研究活動に対して、確固たる基礎となっている。

しかし、こうした現状にもかかわらず、研究者の多くは、以下のように研究の質的な深まりが見られないことに不満を覚えている。すなわち、文革前の研究水準から脱却できないでいるテーマもあるし、千篇一律の如く古い形式を踏襲している叙述もある。このため、それぞれの農民戦争の具体的特徴とかそれらが歴史の発展に対して果して具体的な作用については、いまだ十分な説明がなされたとは言えない。また、それらが、当時の社会経済、階級構造に対してどのような具体的影響を与えたのかについても、分析が足りない。さらに、甚だしい場合には、理論的な後退、或いは原則的な誤りさえ見い出される。例えば、農民戦争の課題は、腐敗した旧王朝を倒し、開明的な新王朝を打ちたてることだけであると言いつける論文があるし、別の論者は、農民戦争は封建社会の自律的な進展を遮り、ひいては中国の封建社会が長期にわたり停滞したことの原因の一つであるとさえ考えている。こうした欠点や誤りは、決して偶然に生じたのではなく、おもに、理論学習を軽視し、史的唯物論の基本原理を正しく理解しきれなかったことに帰因する。

そこで、我々が史的唯物論の原理を会得するためには、以下の二種の方法が考えられる。

第一の方法は、系統的な学習である。この方法を踏んで、はじめマルクス主義の立場・観点・方法を応用し、具体的な問題について分析することを学びとれるのである。複雑な問題にぶつかった時、正確な解釈を下すことに困難を感じたり、或いは、非常に誤った論点の文章を読み、逆に「新」説とみなして高く評価したりするのは、根本的には、理論を充分に会得していないことによるのである。

ただし、系統的学習と言っても、あくまで初歩的なものである。時間の制約もあり、広く大量にマルクス・レーニン主義の文献を学ぶことは不可能である。我々にできるのは、弁証法的唯物論に関する概論的な書物を通読し、さらに、マルクス『『経済学批判』序説』⁽⁴⁾、スターリン「弁証法的唯物論と史的唯物論」(『ソ連共産党歴史小教程』第四章二節)⁽⁵⁾などの重要著作を選読することである。また、この系統的学習は、史的唯物論の方面に重きが置かれるべきである。すなわち、社会構成体の発展史、とくに五段階の生産様式がどのように継起的な前進をとげたのか、また、それぞれの生産様式の下部構造と上部構造の弁証法的関係について学ぶべきである。⁽⁶⁾

かつて、范文瀾氏は、歴史研究には「直通」と「横通」に注意することが必要である、としばしば説かれたが、これは、

まことに重要な指摘である。確かに従来の歴史家も、すべてが「通」をめざしていた。たとえば、中国歴史学の創始者とも言える司馬遷も、「古今の変に通」じることを求めていた。ただし、時代の制約により、それは、あくまで歴史に対する一種の進化主義的な見方であるにすぎなかった。しかしながら、現在の我々には、唯物論的歴史科学があり、それによって正確に歴史発展の客観的な法則を認識することができ、真に「古今の変に通」ずることが可能となっている。従って、

范氏の主張する「直通」と「横通」は、この意味からも非常な説得力があるのである。なぜなら、歴史とは前後相いつらぬく一すじの縦の流れであり、また、諸現象が相互に影響しあう一つの横の面でもあるからである。つまり、「直通」は、歴史の縦軸の発展に注意することであり、一方、「横通」は、同時代の横の面の相互関係に注意することである。そもそも、歴史は、矛盾の運動過程として捉えられる。すなわち、生産力と生産関係の矛盾、階級間の矛盾、新旧(両社会勢力間)の矛盾などが、社会の発展を推しすすめ、そこに原始社会、奴隸社会、封建社会、ひいては今日に至るまでの継起的な発展段階を認めうるのである。「直通」は、この継起的な発展段階を明らかにして、「古今の変に通」じることを目的とする。

また、一定の歴史的段階における社会には、総体としての発展傾向があり、その中で、上部構造は下部構造に規定されて変化発展し、同時に、下部構造に対して反作用を与えている。このため、ある時代の経済、政治、文化の各領域は、互いに関連し、互いに規定しあう。「横通」は、こうした経済、政治、文化の各領域の相互関係に注意して、統一的な解釈を下すことである。中国史に対して、「直通」と「横通」が可能であるためには、まず、理論面での「直通」と「横通」が体得されなければならない。故に、我々は史的唯物論を系統的に学習する必要があるのである。

史的唯物論を学習する第二の方法は、各自の具体的な歴史研究と組みあわせて、マルクス・レーニン主義の重要文献を選び出し、重点的に学ぶことである。たとえば、中国の原始社会、奴隷制社会を研究するには、エンゲルス『家族私有財産および国家の起源』が必読の書である。なぜなら、この書は家族・私的所有・階級さらに国家の誕生と発展法則に対して、科学的な説明と分析を加えているからである。また、中国農民戦争を研究するには、エンゲルス『ドイツ農民戦争』が必読の書である。なぜなら、地域・時代の違いはあっても、等しく農民戦争の比較研究を通じて、当該研究の観点・方法

を学びとることが可能であるからである。

我々がマルクス・レーニンなどの重要著作を学ぶのは、異なる地域・異なる時代・異なる事件の研究分析を通じて彼らを得た結論を、そのまま中国史に持ち込んであてはめようとするのでは決してない。それは、彼らの立場・観点・方法を吸収し、実事求是の態度を以て我々の研究の結論を導き出さるがためである。

二 中国史の系統的理解のために

中国史の研究には、上述のように、史的唯物論を学び、理論面での「直通」と「横通」を体得する必要がある。だけでなく、さらに、中国史の基礎知識を掌握し、中国史に対する「直通」と「横通」を可能にするための土台を築かなければならない。

初学者の歴史学習は、もちろん研究と呼べるものではないが、やはり将来の歴史研究の備えとなるようにしなければならない。中国の歴史は悠久であり、史料も膨大に存する。このため、研究対象となるのは、ある時代、ある民族、ある地域の歴史に限られる。甚だしい場合には、一つの経済制度と

か政治制度、或いは一つの事件、一人の人物にまで、研究範圍が縮小されることがある。しかし、初学の段階では、「直通」と「横通」を可能にする系統的な知識の吸収をはかるため、裾野の広がった基礎固めに努力し、また、中国通史の学習に力を注ぐ必要がある。このようにしてこそ、将来、専門的な研究に従事する時、縦の流れに通じ、横の関連を理解することができ、研究を深化させ、正確な結論を導き出すことができるようになるのである。

歴史の流れを断ち切り、特定の問題を、静止させ、孤立させて、一面的に研究するようなことはできない。もし、初学者が一定の成果を上げることに急で、ただ一点だけを研究し、線とか面への広がりを見ないならば、将来の研究に困難を生じさせるだけでなく、最初から、良い研究など望むべくもない。このことこそ、経験のある多くの研究者たちがしばしば言及する「博」と「専」との関係である。

では、初学の者は、どのようにして中国史に関する「直通」と「横通」の系統的な知識を掌握することができるのであるか。そのためには、まず、長期的な学習計画をたて、それに従って計画的かつ系統的に歴史の書物を読みすすめ、その傍ら読書筆記を作成することが緊要である。この読書筆記に

よって、自己の学び得た知識をしだいに系統化し、さらにそれを基礎としてより豊富な知識を得なければならぬ。また、時間的に前後する経済制度や政治制度の関連性及び相違点を理解するだけでなく、前後して起こった事件の相互関係及びその歴史的機能をも理解しなければならぬ。さらに、各時代の生産闘争、階級闘争が歴史の発展を推しすすめた役割を明らかにするのみならず、重要な人物の歴史における役割をも探求しなければならぬ。また、各時代の政治的運動、思想傾向、人文科学・自然科学の発達なども、すべてが下部構造、とりわけ生産力の発展状況から説明されなければならぬ。これらの課題をこなしていくためには、学び取った知識をその点だけにとどめるのではなく、点から線へ、面へ、というような広がりを持ったひとつのまとまりとしなければならぬ。また、そうすることによって、はじめて基礎的な歴史の知識を真に自己のものにできると考えられるのである。ただし、この場合、丸暗記するのでは意味がない。丸暗記したものは、すぐに忘れてしまうからである。自らの思考を経て、絶えず読書筆記を行ない、その上で整理が加えられた系統的な知識は、ひとたび記憶されれば、長きにわたり忘れられるはずがない。なぜなら、多くの史実は、もはや互いに無

關係に孤立した点の集合ではなく、まとまって一すじの線、或いは一つの面となっており、さらに相互に關係がつけられているため、容易に記憶できるからである。

勿論、初学者にとって、学び得た知識を系統化するののはたやすいことではなく、それは一步一步と進みうるだけである。況んや、歴史学上の多くの問題が解決をみていない今日、どの辺から手をつけてよいのかさえ、わからないかも知れない。たとえば、古史分期問題(奴隸制から封建制への移行時期)に闕しても、封建社会の開始期を、それぞれ西周・春秋・戦国・秦・後漢・魏晉南北朝とする六種の学説が並立している。このようにどれか一つの学説に依拠しないかぎり、歴史の知識を系統化するなど考えられぬ状態なのである。そこで、初学者としては、ひとまず先生が「授業で」講ずる学説にのっとり、自己の知識の体系化ができれば充分である。この段階に達したあとには、異なる体系の著作を比較検討してみることが大切である。たとえば、郭沫若主編『中国史稿』(人民出版社・一九七九年)と、范文瀾主編『中国通史』(人民出版社・一九七八年)との比較をしてもよい。その際、重要な歴史学上の問題に関する両者の異なる見解を比較することに重点を置き、系統的な読書筆記を行なえば、古代史の理解を深め、

より高度な学習への手がかりとすることができ。

当然、初学者が学んだばかりの通史に整理を加えた系統的な知識なるものは、非常に浅薄であり、筋道も明確でなく、甚だしい場合には理解が正しくないこともある。しかし、それでも、知識の系統化作業は、やはり必要である。なぜなら、それにより、少なくとも以下の二種の効果を期待できるからである。すなわち、まず、既に習得した知識を簡明にまとめあげることにより、その把握に便利となる。しかも、それは同時に次の段階の学習の基礎を築くことにもなる。もし、学習が進み、自己の系統化した知識に不十分な点や誤りを発見した時には、補充、改正をすることができよう。まさに、こうした過程こそ学習の進歩なのである。

習得した知識を実際に「直通」した系統的なものとするためには、重要な歴史事象の性質に照らし、分類して整理を加え、特に変化発展の相の捕捉に重きを置いてすすめて行かねばならない。以下、農具・耕作制度・土地制度の分野における整理の方法を例示してみよう。農具は、春秋中期以前には、石器と少数の青銅製のものが使用されていた。その後、春秋後期に鉄製のものが現われてから、三度の大きな変化がみられた。すなわち、戦国から秦漢までは、可鍛鑄鉄(脆さを

本性とする鑄鉄に加熱軟化処理を加え、強靱さをもたせたもの〕製の農具が広く普及していた。唐宋時代には、鋼刃鍊鉄〔刃が鋼鉄、本体が鍊鉄のもの〕製の農具が使用され、明清に至ると「擦生」農具〔生鉄淋口〕の方法を用いた鍊鉄製農具〕が普遍化してくる。次に、耕作制度は、西周には、数年間耕作して地力が衰えると、その場所を放棄して、他へ移動して耕作する「撩荒農作制」が実行されていた。戦国に至ると、毎年つづけて耕やす「土地連種制」となり、また、冬小麦と〔粟など〕他の穀物を組みあわせた「複種制」も行なわれるようになる。漢代には、北方で複種制が一層普及し、特に後漢には、粟・冬小麦・大豆のなかで組みあわせを換えて行なう「輪作複種制」が広まる。西晋には、米の二期作が始まり、米と緑肥作物の輪作複種も始められる。隋唐では、南方で米と麦を複種する「一年兩熟制」が発展し、南宋の嶺南地域では「一年三熟制」が行なわれた。明清には、輪作複種制がより一層発展する。土地制度については、西周・春秋時代には井田制が、戦国・秦漢には私的土地所有と国有制が行なわれるようになる。また、漢から魏にかけては屯田制が採用され、西晋には占田制が、北魏・隋唐には均田制が実行された。宋代には土地私有が実行され、官田さえ私田化するよ

うになってくる。

このように、基礎的な知識を整理して系統化するためには、たんに一般的な通史を読むだけでは、やはり不十分である。内容が詳細で信頼のおける断代史を選び、精読することが望ましい。たとえば、陳夢家『殷虚卜辞綜述』〔科学出版社・一九五六年〕、董書業『春秋左伝研究』〔上海人民出版社・一九八〇年〕、楊寬『戦国史』〔上海人民出版社・一九八〇年〕、王仲犛『魏晋南北朝史』〔上海人民出版社・一九七九年〕、韓国磐『隋唐五代史綱』〔人民出版社・一九七七年〕などを挙げる。このうち、陳夢家『殷虚卜辞綜述』は、甲骨文の研究成果を全面的・系統的に総括した著作である、甲骨文は殷代史研究の主要な史料であり、加えてこの書は文献史料、考古学的史料を博引しているため、実際には殷代の断代史としての性格を備えている。また、董書業『春秋左伝研究』は、春秋時代の史料を考証した著作であるが、同時に、西周・春秋時代の各種制度の変遷、重要事件の原因と結果、さらには経済・文化の情況に留意しているため、やはりこの時代の断代史として学ぶことができる。上掲の諸書は、初学者にとっては、一度に消化しきれぬほどの内容と分量があるので、重要な箇所を選んで精読するのも一方法であろう。

通史や断代史を学ぶ過程において、必ず多くの問題について、それぞれの研究者の意見の相違、すなわち、主張する見解・根拠とする史料の解釈など、すべてが同じでないことに気づくであろう。しかし、学術界におけるこうした現象は、極めて正常なことである。というのも、非常に大きな、そして複雑な問題の場合、それについて一人の研究者が短時間で明確な認識を持つのは不可能であるからである。史料の解釈が異なったり、或いは史料自体が充分でなかったりすることにより、たとえ同じようにマルクス主義の原理を用いて解釈・分析を加えたとしても、やはり異なった結論が導き出されることがあるのである。このような問題に対してこそ、我々はより一層研究を深めなければならない。

たとえば、殷周時代史に例をとって話をすすめると、井田制だけについても、三種の異なる見解が並立している。すなわち、「公田での労働を」封建的な労働地代とする説があり、また、奴隸労働を搾取したり、土地を賞賜する時の計算単位であるとする説があり、さらに、原始的な共同体的土地所有の残存したものが、そのまま奴隸主に搾取の手段として利用されたものであるとする説がある。これだけにとどまらず、井田制における「籍田」「公田」で労働する「庶人」について

も、多くの解釈が存する。また、甲骨文中で農業労働に充てられている「衆」、「衆人」についても、内容を大きく異にする五つの見解がある。すなわち、奴隸説、自由民説、家父長制的家族成員説、奴隸主説と、「衆」を奴隸主階級中・上層とし、「衆人」を奴隸主階級下層とする説である(王宇信『建国以来甲骨文研究』〔中国社会科学出版社・一九八一年〕一〇頁～一一七頁)。こうした状況下では、より一層学習に励み、重要な問題についての知識を増やす一方で、見解を異にする代表的な論考を選び、熟読し比較検討することが必要である。

このような、同じ問題に関して、見解も史料の根拠も異なる論考の比較検討を通じて、視野を広げ、思考の閭口を拡大することができる。さらに、こうした作業を進める中で、当該問題についての史料を収集する方法や、論究の深化をはかる手順について、了解することができるであろう。

たとえば、上述の井田制に関する三種の異なった見解を検討すれば、単純に考証学的方法を以て古代史の研究をすすめるのは有効ではなく、歴史発展の普遍的な法則に照らし、さらに国内の少数民族やその他の地域の民族の同じような歴史状況との比較研究を行なうべきことを、ただちに理解できよう。

すなわち、『孟子』以前には井田制に関する記載がなく、漢代以降の『韓詩外伝』、『穀梁伝』、『漢書』食貨志、『公羊伝』何休注などに至って、しだいに詳細に記録されてくるという史料状況において、もし単純に考証学的方法を以てすれば、孟子の説いた「公田」と「私田」からなる井田制は、儒家の理想に出る一種のユートピアにすぎないとの結論へ容易に達してしまふであろう。実際、六〇年前の胡適「井田弁」(『胡適文存』卷二)は、こうした論断を下して井田制の存在を否定している。しかし、歴史状況の類似する他の民族と比較をすれば、胡適のこうした結論は独断であり、誤りであることがはつきりする。雲南の西双版纳傣族自治州⁽⁸⁾では、民主改革代前には原始的な共同体を残存させており、「計口授田」の制度が機能していた。すなわち、一五才から結婚するまでの者には、基準の土地の四分の一から二分の一が与えられ、結婚後からは五〇才まで一定量が確保され、五〇をすぎると返還しなければならなかった。こうした状況は、『漢書』食貨志の伝える「民、年二十にして田を受け、六十にして田を帰す」という「私田」授受の制度と全く同様であると言えないであろうか。また、中世ヨーロッパのマルク共同体⁽⁹⁾においては、しばしば土地の割替が行なわれた。すなわち、土壤の好

悪、経済効率にもとづいて、耕作地の分配をやりなおすのである。最初は、毎年一回であったが、後には三年、六年、九年或いは一二年に一回と期間が延ばされた。これは、『公羊伝』宣公一五年で、何休が井田制について、「肥饒^{こえたち}は独り楽しむこと能わず、墽^{やせ}墽^たは独り居る能わず。故に、三年にひとたび土を換え居を易え、財均^{ひと}しく力平^たらかならしむ」と注しているのと全く同じ状況ではなからうか。かりに、本當に儒家の想像に出たものならば、何故に国内或いは国外の共同体の情況と、かくもみごとに一致するように想像することができたのであろうか。このことによっても、井田制は確かに原始的な共同体の尾を引く土地制度であり、必ずしも全てが孟子のユートピア思想によるのではなく、ましてや漢代の人々が逐次的に粉飾を加えて作りあげたものなどではない、ということが理解できよう。

関連して述べれば、一九二〇年に、胡適・廖仲愷・朱執信^{リョウチュウケイ・シュツシ}などが、雑誌『建設』誌上で井田制に関する討論をくりひろげたことがある。注目すべきは、その際、廖仲愷が歴史学の重要問題を論証するには、文献上の「直接証拠」以外に、傍証が必要であることを主張したことである。すなわち、廖氏は、胡適が井田制の存在を否定するのに反駁を加えた際、

『春秋』宣公一五年の「初めて畝に税す」という記事、これに対する三伝の解釈、ならびに『国語』魯語下の「先王、土を制し田を籍するに力を以てす」などの記載を「直接証拠」とし、さらにヨーロッパ中世に残存した共同体的土地所有を傍証とすることによって、井田制の存在を立証したのである。このように六〇年も前の論争ではあるが、今日の我々が学んで啓発されるところは少なくない。⁽¹⁰⁾

こうして歴史学上の問題を論じた文章を読み、啓発を受けるところがあれば、ただちにそれを礎として、より突っ込んだ研究をすすめるべきである。その場合、理論的裏づけを確保し、史料的にも「直接証拠」・傍証とも充分に把握し、さらにそのような第一段階の考察を札記としてまとめておくのがよい。大きな業績をあげてきた従来の学者たちが、堅実でしかも見識に富む著作を産み出すことができたのは、こうした読書札記を書くことから始めたことに依ると思われる。しかも、それらは、先人の研究成果を単純に書き列ねるとか、集めた史料を書き並べるといふ次元のものではなく、史料を自己の観点に結合させ、自分自身の体系的な認識・見解を持つことができるような質にまで高められなければならない。たとえば、清代の多くの学者たちは、啓発さるべき多くの札

記を残している。顧炎武『日知録』、趙翼『二十二史劄記』、『陔余叢考』、王鳴盛『十七史商榷』、俞正燮^{ユゼンジャク}『癸巳類稿』、『癸巳存稿』などは、我々の歴史研究に裨益するところは大きく、坐右において参考にすべきである。⁽¹¹⁾ もちろん、我々が読書札記を始めても、直ちにこれら著名な学者の域に達することは不可能である。しかし、努力して継続すれば、理論的水準の向上、把握する史料の増加にともない、札記の質も必ずや向上するはずである。時には、自分が過去に書き留めた札記に、足らぬところや誤りを感じて、補充或いは修正を加えねばならぬこともあるが、こうしてこそ研究に進歩がありうるのである。創造性豊かな研究論文や著作は、けっして瞬時のひらめきに頼り、一筆で書きあげられたのではなく、研究者の幾年幾月にもわたる長期の精進の積み重ねの上に、はじめて為し得ることなのである。あるものは、先人の多くの札記を基礎として、それにより一層の考究を加えた成果であらうし、あるいは、自分で札記を記す過程において糸口をつかみ、さらに考察を深めた結果であるかも知れない。

三 より高度な研究のために

以上は、おもに基本理論及び系統的な知識の体得の重要性

について述べた。しかし、これらにとどまらず、より高度な研究をすすめるための方法を身につけねばならない。しかも、それは史料を収集・解釈・考証する能力、歴史事象を総合・分析する才能を含みこんでいなければならない。

まず、史料の収集・解釈・考証の能力について述べよう。たとえば、もし史料収集の力に缺けるならば、細かく史料を把握できず、そのため偏った認識に陥り、正確な結論に達することは不可能となるであろう。史料を詳細に把んでこそ、自分の下した結論がうまく史実を解釈し得ているか、結論に例外があり得るか、などを知ることができるのである。例外は、個別的であったり、少数であったり、また例外を引き起こす特殊な原因があるような場合には、何ら結論にかかわらない。しかし、例外が甚だ多い時には、ただちに結論を破棄して新たに考え直すべきである。また、史料を解釈する才能も、重視されねばならぬ。なぜなら解釈に誤りがあれば、必然的に結論も誤ってくるからである。

〔以下、具体的な方法について述べよう〕かつて、「老^{ねんばい}輩」の学者たちは歴史研究における四つの鍵を重んじた。すなわち、目録学、年代学、歴史地理学、官制史〔官職〕である。確かに、これらは歴史研究には不可欠の存在である。莫大な量

の文献を扱う中国史研究において、必要な文献をさがし、詳細に史料を把握するためには、目録学に通曉していなくては話にならない。また、歴史の記録は、時間・地点・人の行動と切り離せぬし、特に政治史の史料は、位階の上下を問わず官僚の行動が問題となる。このため、史料の解釈と活用のためには、年代学・歴史地理学・官制史を自分のものにしなければならぬ。

目録学は内容が非常に多岐にわたるので、まず各自の研究上の必要に従って理解することが大切である。たとえば、古代史の場合、古代史籍〔漢籍〕の目録・近人の著作目録・考古学的資料の目録・史学論文目録などに注意しなければならぬ。古代史籍の目録としては、『四庫全書総目提要』・『中国叢書総録』（中華書局上海編輯所・一九五九～六三年）・『書目答問補正』（中華書局・一九六三年）などがある。近人の著作などに関しては、それぞれ新らしく編まれた目録が出版されている。⁽²⁾

年代学の方面には、『中国歴史紀年表』（万国鼎編・中華書局・一九七七年）、『二十史朔閏表』（陳垣・中華書局・一九七八年）などがある。

歴史地理については、『中国歴史地図集』（全八冊）、『辞海』

歴史地理分冊、『読史方輿紀要』などがある。さらに詳しく古代の地名を調べる必要がある時には、清代の学者たちの考証を捜さねばならない。たとえば、先秦の地名は、年代が遠いこともあり、問題は複雑で諸説が紛々としている。春秋時代の地名考証だけでも、高士奇『春秋地名考略』、江永『春秋地理考実』、沈欽韓『春秋左氏伝地名補正』などの書がある。

官制史については、近人〔曾資生〕の著に『中国政治制度史』四冊(先秦・秦漢・魏晋南北朝・隋唐五代)があり、資料が比較的豊富で、検索に便利である。¹³⁾ただし、この書は、抗日戦争期に重慶で出版(土紙本)され、現在では稀覯書となっており、この方面の新たな著作が望まれるところである。

以上、歴史研究に不可欠の四つの鍵について述べたが、現在の時点で考えると、やはりこれらだけでは不十分とせざるを得ない。たとえば、ある時代とか問題についての史料・研究書・論文の目録を充分に活用するだけでなく、先人がその方面においてなした研究の過程と業績を理解し、次の段階の研究へいたるポイント及び手順を明確にしておかねばならない。また、政治史・経済史などの複雑な問題を研究するためには、歴代の各種の制度を調べる方法を身につけ、必

要な知識を把握しておかねばならない。歴代の制度を調べるには、『通典』、『通志』、『文献通考』に、清代に編まれた続編を加えた『十通』がある。時代別に制度を調べる時は、西漢、東漢、唐、五代、宋、明などの会要類が便利である。¹⁴⁾

次に、各時代の生産力の発展情況を知るためには、生産用具、生産技術等の発展を含めた科学技術全般に関する知識、すなわち科学技術史を学ぶことが求められる。たとえば、冶金技術に関しては、『中国冶金簡史』〔北京鋼鐵学院『中国冶金簡史』編写組・科学出版社・一九七八年〕、『中国古代冶金』〔同上『中国古代冶金』編写組・文物出版社・一九七八年〕などの書がある。また、各時代の経済発展の情況を把握するためには、戸口・田地・田賦などの統計を知らねばならない。この点については、梁方仲『中国歴代戸口・田地・田賦統計』〔上海人民出版社・一九八〇年〕が参考となる。こうした各時期の田畝面積や実際の生産高を計算するためには、度量衡の変遷に対する知識が必要となる。梁氏上掲書附載の「中国歴代度量衡変遷表」、『中国歴代度量衡図録』〔国家計量総局・文物出版社・一九八一年〕が参照されるべきである。

歴史研究の資料としては、文献史料だけでは不十分であり、さらに地下から出土した考古学的史料も掌握しなければなら

ない。かつて王国維が提唱した「二重証拠法」とは、まさに、こうした「紙上史料」と「地下史料」との結合をはかることであった。この方法は、対象が古い時代であるほど必要性を増してくる。そうした考古学的史料としては、殷代には甲骨文、西周には金文、戦国・秦には雲夢竹簡及びその他の竹簡・帛書史料、漢代には居延・敦煌出土の漢簡、魏晉南北朝隋唐には吐魯番・敦煌出土文書及び石刻墓志銘などがある。

建国後三〇数年来の巨大な考古学的成果は、歴史研究に重要な一次史料を提供してくれている。『文物考古工作三十年』〔文物出版社・一九七九年〕ならびに『文物』、『考古』、『古学報』等の雑誌所掲の資料及び論文がまず参考にされるべきである。

また、古代史料の読解には、古代漢語のマスターが必要である。史料を読む時には、後代の人、とりわけ清代及び民国以降の学者の校勘・注釈をあわせて読むべきである。さもないと、理解を深めるのが困難であるばかりでなく、誤った解釈をすることさえあろう。清代の学者が、校勘・注釈に費やした精力は膨大であり、我々は、そうした研究の成果をぜひとも継承しなくてはならない。実際に史料を読む場合には、質の高い注釈書(清代以降の校勘・注釈を網羅した著作)を選

び精読し、必要な時に他の校釈を参考とするようにしなければならない。たとえば、漢書を読む時には、王先謙『漢書補注』を主とし、さらに王書を補訂するそれ以降の著作を参照するのがよい。⁽¹⁵⁾同じように、古代史料読解には、文字学・訓詁学の知識が不可欠であり、まず、『説文解字』、『爾雅』、『広雅』、『釈名』などに対する清代の学者の研究を理解する必要がある。こうした作業は、古文獻の読解能力の向上に、必ず得るところがあるはずである。

殷周の歴史を専門に研究する場合は、さらに古文字学の基礎知識が必要となる。甲骨文に関しては、文字を判読し、常用語句を理解し、さらにこの分野の考釈を読解できるだけでなく、各種の著録を渉猟し、工具書を活用できる能力を備えなければならない。こうした基礎が充分でないと、想像にまかせた言論により、読者を誤らせ、ひいては笑い話さえ作り出しかねない。実際に、こうした例は少なくない。たとえば、郭沫若「古代研究的自我批判」(『十批判書』所収)は、ある学者が、甲骨文の「臣、門(闕)にあり」の「門」字が地名であることを知らず、奴隸が角闕に用いられていると解釈した例をあげている。また、西周土地制度を論じた最近の文章に、大克鼎の「女に井人の東に奔れるを賜う」の「井」

字が「邢」字の省文であることを知らず、「井人」を「井田中の共同体成員」と解釈するものがあつた。「井」と「邢」の文字の違いはわずかではあるが、引き出された結論の隔たりは甚だしい。こうした例によつても、基礎固めの重要性が充分にわかるであらう。

△訳註▽

(1) 『怎樣學習大學文科』復旦大学出版社・一九八二年所収。

(2) 最近のこうした類の文章は、枚挙にいとまない。目についたものをあげると、『中国当代社会科学家』・書目文
献出版社・既刊六冊、『中国現代社会科学家伝略』・山西
人民出版社・既刊四冊、『治学之道』・齊魯書社・一九八
三年、『治学集』・上海人民出版社・一九八三年などが雜
誌の連載を集めたものであり、さらに『文史知識』、『学
林漫録』、『中国歴史学年鑑』その他にも多く見られる。
また、単行のものには、『中国現代語言学家』・河北人民
出版社・一九八一年、『学者論学』・北京師範大学出版社・
一九八一年、『中国当代科学家伝』・知識出版社・一九
八三年・既刊一冊、『中国史学家伝』・遼寧人民出版社・

一九八四年などがある。これらの中には、まれに「自慢話」に終わっているものもみられるが、大部分は単なる研究方法だけにとどまらず、学問と人生の深層にまで説き及んでいる。特に、侯外廬が『中国哲学』第三輯(生活読書新知三聯書店・一九八〇年)以降に連載した、「翻訳『資本論』的回憶」・「坎珂の歷程」などは、そうした意味で興味深い。また、門下生たちが先学の学問、人生を追憶した『勵耘書屋問學記』・三聯書店・一九八二年、『吳晗的學術生涯』・浙江人民出版社・一九八四年、『吳承仕同志誕生百周年紀念論文集』・北京師範大学出版社・一九八四年、『燕園論學集』・北京大學出版社・一九八四年なども、感銘させられる文章が多い。貴重な現代學術史の一面である。しかも、これまで、日本の中国史研究者が、あまり知ることができなかった中国の研究者自身の経歴を知り得るという点において、さらに重要な意味を持つ。すなわち、往々にして研究の実証的部分だけで理解せざるを得なかった中国の歴史研究に対して、その背景に踏み込んで理解する可能性が出てきたのである。

これらの文章を一読すれば、直ちに以下のような興味

深い事実に気がつく。それは年輩の中国の研究者が、しばしば歴史学者という名称で括るのが不可能なほど、多彩な経歴を持っているということである。たとえば、郭沫若が小説家であり、南昌起義にも参加し、常に政治に積極的にかかわっていった革命の士としての側面を持っていたことは周知のこととして、翦伯贊・呂振羽などは本来革命活動に従事する共産黨員であった。陳夢家も若いころは詩集を出すほどの文学青年であった。賀昌群・趙儷生・尚鉞等は、いずれも文学畑から歴史へと転身してきたのであり(聞一多などもこうした傾向をもつ)、アジア的生产様式論を導入し、中国固有の古代社会の構造を明らかにしようとした侯外廬は、もともと李大釗によりマルクス主義に開眼させられたのであり、本来は経済学を専門としていた。

勿論、こうした事実は、彼らが経・史・文のいずれにも通ずる伝統的な知識人としての一面を留めていたからであるとも考えられよう。しかし、彼らをして他の分野から歴史学へと転進せしめたのは、やはり、彼らが生きた時代そのものの要請であると考えるべきではなからうか。解放前の中国において将来のあるべき姿を具体的に

摸索するためには、あらゆる知識人が多かれ少なかれ歴史的な物の見方をせざるを得なかったとも言えよう。

従って、彼らの筆になる歴史学の著作は、現実との厳しい緊張の中から産みだされたものである。また、こうした現実的な歴史学のあり方こそ、中国の伝統と言えるのかも知れない。いずれにしても、中国の研究者の著作は、彼らの生きた現実(経歴)や研究のあり方と切り離しては理解できないのではなからうか。訳者が、それらに関心を持つのは、こうした理由からである。

(3) 以下の農民戦争史研究に関する一段は、白鋼「重新学習馬克思主義、把農民戦争史的研究引向深入」(『光明日報』一九八二年一月一日原載、『歴史研究的理論与方法』・紅旗出版社・一九八三年所収)に、依拠しておられると思われる。

(4) 『馬克思恩格斯全集』一三卷(人民出版社・一九六二年)所収。同書「第十三卷説明」には、この文章が、巨大な理論的意義と独立した科学的意義を有し、史的唯物論の本質に対し「經典性」の定義を下した、とある。

(5) 毛沢東「改造我們的学習」(『毛沢東選集』第三卷)により、理論と現実が結合された典型であり、ここ百年來の

全世界共産主義運動の最高の総合と総括である、と評された書である。

(6) 中国の学生の間では、理論面に関しては、『資本主義前的各社会経済形態』(人民出版社・一九八〇年)、『論資本主義以前諸社会形態』(文物出版社・一九七九年)、『論歴史科学』(人民出版社・一九八〇年)といった概説書や原典翻訳技粋集がよく利用されている。

(7) それまでは、刃部は別個に用意した鋼鉄製のものを接合する方法をとっていたが、鍛鉄製の刃部に鑄鉄を混合して、その部分だけ炭素含有量を高めることによって鋼鉄組織とする方法がとられるようになったのである(楊寬先生『中国古代冶鉄技術發展史』・上海人民出版社・一九八二年)。

(8) 一九五〇年に解放、五三年に自治区成立、五六年に高級合作化、五八年に人民公社化した『中国少数民族』・人民出版社・一九八一年)。

(9) 以下に楊先生の説かれるマルク共同体に関する公式的な見解は、現在の西洋史の実証的研究の明らかにする所とは、些か異なるようである。

(10) 詳しくは、楊先生「重評一九二〇年關於井田制的弁論・

『江海学刊』・一九八二年三期を参照。

(11) 訳者が、楊先生に見せていただいた読書筆記の一部の内容を紹介すると、崔述『王政三大典考』・『豊鎬考信別録』(ともに『崔東壁遺書』所収)、顧炎武『日知録』、俞正燮『癸巳類稿』・『癸巳存稿』、趙翼『陔余叢考』、宋翔鳳『過庭錄』、黃以周『傲季雜著』、蔣超伯『南澗梧語』、黃生『義府』、毛奇齡『經問』、洪頤煊『讀書叢錄』、李貽德『左伝賈服注輯述』、王筠『菴友蟻術編』、桂馥『札樸』、盧文弨『鐘山札記』、于鬯『香草校書』、閻若璩『潛丘劄記』、(唐)陸淳『春秋集伝纂例』、万斯同『群書疑弁』、吳承志『横陽札記』、朱一新『無邪堂答問』、錢大昕『十駕齋養新錄』、金鶚『求古録礼說』などの諸書の記述を、内容にしたがって分類し書き写したものであった。例えていうなら、王重民・楊殿珣『清代文集篇目分類索引』のある項目に関する質の高い文章を本文つきで配列したようなものである。先生が若い時に、蔣維喬氏の下で『呂氏春秋彙校』を共同で完成される過程で、版本学・目錄学の方面の基礎を固められたのに対し、この筆記を作成することにより清朝考証学への理解を深められたらしい。インクでびっしり書きこまれた精

装のノートは、強烈な迫力を感じさせるものであった。先生には、こうした類の筆記がまだ他にも数部あるとのことであり、作成後、数十年を経た今日でも、御自身の研究用索引として使用されている。

(付記) 脱稿後、解題に記した「怎樣学習春秋戰国史」を入手できたが、先生の学問に対する全般的な姿勢をうかがうためには、ここに訳出した文章の方が適当であると感じた。

(たかぎ さとみ 名古屋大学大学院博士後期課程)

- (12) 孫殿起『販書偶記』・上海古籍出版社・一九八二年、同『統編』・同出版社・一九八〇年、『清史稿藝文志及補編』・中華書局・一九八二年など。

- (13) 陶希聖編校として、啓業書局(一九七三年)から出版されている書のことである。

- (14) 現在、楊先生の指導のもとに『戦国会要』の編輯がすすめられている。

- (15) 楊樹達『漢書窺管』・科学出版社・一九五五年、施之勉『漢書補注弁証』・新亜研究所・一九六一年、陳直『漢書新証』・天津人民出版社・一九七九年、呉恂^{ゴウジン}『漢書注商』・上海古籍出版社・一九八三年など。

- (16) ただし、すべての「井」を「邢」とすることは、少し問題があるようである(樋口隆康「西周銅器の研究」・『展望アジアの考古学』・新潮社・一九八三年所収)が、少なくとも「井」が井田制を意味しないことは事実である。